

白糠高生向け 町開設の「久遠塾」3年

親身な指導で進学希望増

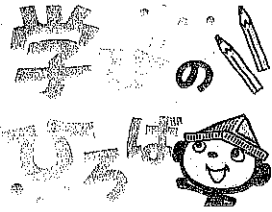
【白糠】白糠高の魅力向上に向け、同校の生徒を対象に町が始めた公営塾「白糠町久遠塾」が開設3年を迎えた。親身なサポート態勢が功を奏し、大学への進学希望者も増えてきた。各高校が少子化で生徒確保に苦勞する中、町は塾を中学生や保護者にアピールし、白糠高の入学希望につなげたいと考えた。

（金井裕紀）

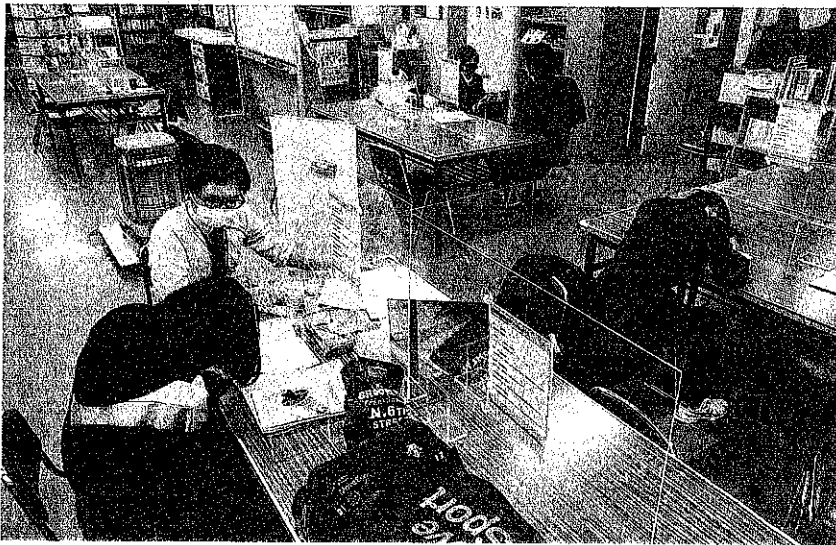
今月4日の放課後、白糠高の図書館内にある同塾で、1〜2回は勉強を教える。授業を終えた生徒5人は、塾講師に取り組んだり、塾講師にマンツーマンで数学の三角比の問題の解法を尋ねたりしていた。

講師は元教諭

同塾は白糠高の生徒対象に、2018年6月に開校。教育コンサルティング会社プリマペンギン（東京）が町の委託を受け運営する。講師は道外の元中学校教諭ら4人が務め、主要全教科をカバー。主に授業で分からなかった点について生徒の疑問に答えるほか、公務員試験や大学入試の小論文対策などにも対応する。平日の昼休みと午後3時半〜9時のほか、定期考査前には土日も午前9時〜午後4時半まで開く。利用



全校の半数利用／学校存続へ魅力アピール



久遠塾で講師に勉強を教してもらった生徒

料は無料。現在は全校生徒65人のうち、約半数が利用。1日10人ほどが訪れる。開塾当初、同校では就職

する生徒が多かったが、塾開設後は徐々に大学進学希望者が増加。実際に進学者も出ている。釧路公立大を志望する3年生の手塚壺さん（17）は小論文対策などでほぼ毎日午後9時まで塾を利用。「わざわざ町外の塾に通わなくても良いし、好

きな時に使えるのでとても便利」と話す。

20年3月まで塾長を務め、現在は白糠高地域教育コーディネーターの上内智英さんは「塾を活用することで多様な進路が実現できるといことが少しずつ浸透してきた」と強調。白糠高と連携し、講師が生徒の就職面接の指導を行うなど、教諭の負担減にもつながっているという。

他校と差別化

町が塾を開講した狙いは生徒確保による白糠高の存続だ。道内では生徒確保が見込めず、閉校が決まった学校もあり、釧路管内でも道教委が9月に発表した22〜24年度の公立高配置計画で、24年度に4校で1学級ずつ減らすなど中卒者減少による学級減が進む。そうした中、道教委は高校存続や地元中卒者を確保するための方法の一つとして、各学校の魅力向上や他校との差別化を掲げる。塾開設も町が17年4月から取り組む「白糠高魅力化プロジェクト」の一環だ。

町教委によると、白糠町

内の中卒者のうち、白糠高に進学するのは約3割。ここ数年の入学者は20〜40人台で推移している。担当者は「白糠高に進学する中学生の割合を5割まで高めた」と目標を定め、今後地域から求められる塾づくりに努める考えだ。久遠塾の向井啓暢塾長は「地域に今後も教育の場を残すため、白糠の人にもっと認められるような塾にしたい」としている。